

三毛猫のモモは交通事故で片足を失っていたが、気丈にも何匹も子猫を産み、子育てをした。子猫たちは皆元気よく、すくすく育ち、それぞれ貰われていった。

庭の陽あたりのよいベンチが、モモのお気に入り場所だった。

モモは、ことある毎にこう言っていた。

「あたしはね、ここのおじさんにはうんと恩があるの……」

「ふうくん……」

「あたしがバイクにはねられた時、おじさんは瀕死のあたしを車に乗せて、街の大きな病院へ連れていってくれたの」

「そりゃあ大変だったな……」

「片足を失う大手術だったけど……そりゃあ、痛かったし、つらかったわ。でも長いこと入院して、元気になったのよ。そしておじさんは、また迎えに来てくれたの……あれから、あたしはキタローっていう連れ合いにも出会って、子供にも恵まれて……子供達も皆、立派に育てそれぞれ良い処に貰われていったわ……」

「そりゃあ、よかったね……」

「ええ……だからあたし、このご恩は忘れない……命の恩人ですもの……」

クロフカも、あの夏の日の事は忘れなかった。

優しいテオおじさんとマーサおばさんに拾われたこと……

あの日、庭の茂みの陰で呼びかけられた声の優しさ、二人の優しいま

なごし、冷たくておいしかったミルク……眠りを誘うような木陰を吹き抜ける心地よい風……

感謝していた。心から感謝していた。

そして、感謝して、この家を守ろうと心に決め、番犬に励んだ。

庭をはさんで、家と工房とガレージをいつでも行ったり来たり……

ここにやってくる人たちを尻尾を振って出迎え、しかし、怪しい人や車が近づくと、喉を鳴らして威嚇した。

工房に出入りする人間たちも、クロフカは嚴重にチェックした。

何か道具を手に持っている人や、車に何か積み込もうとする時は、本気で吠え立て、よくテオおじさんから

「勘違いだよ。これはいいんだよ積み込んで。この人はいい人だよ」となだめられた。

が、そのおかげで怪しい物売りなどはやっては来なかった。黒い大きな犬は、そこにいるだけで迫力があつた。

クロフカは、名実共に立派な番犬となった。

ある日、クロフカがいつものようにポーチに座っていると、何処からか声がした。聞き覚えのある声である。

「おじちゃあん……」

振り返ると、門のところに一匹の赤犬が立って中をのぞいている。

以前、葡萄酒工場の前庭で出会ったハナである。

あの時と変わらず、薄赤い鼻先のニコニコした顔で、思いっきり尻尾を振りながら、こちらを見ている。

「ハナ……ハナじゃないか……」

「 …おじちゃん！ …」

ハナは、そのままトコトコと、敷地の中へと入ってきた。

クロフカも、フェンスのところによってきて、ハナのことを真っ直ぐに見て尻尾を振った。

「 …ここ、おじちゃんち？ 」

「 うん、そうだよ ……しばらくだね ……よく来たね 」

「 …すごい ……おじちゃんち、すごいね 」

「 ハナ、僕は、おじちゃんじゃないよ …… 」

クロフカは笑いながら言った。

「 …僕はクロフカっていうんだ 」

「 …ふうーん、クロフカ、か …… 」

「 ハナ ……どこに住んでるの？ よかったら、もうずっと此処においで …… 」

「 …ほんと？ …此処にいてもいいの？ 」

「 …ああ、いいともさ。此処にいてもいいんだよ ……僕が、マーサおばさんに頼んであげるよ 」

「 …ありがと ……でもねえ、今あたいね、西のはずれの沼の一軒家に住んでんの 」

「 …ふうん、そうなのか …… 」

「 …うん！ だから、時々遊びに来るね …… 」

「 …ああ、いつでもおいで …… 」

それからというものの、時折クロフカのところには鼻先の薄赤い犬が遊び

にやっつて来るようになった。

番犬をし、モモと遊び、ハナがやっつてきては、また一緒に遊び、  
また楽しい素敵な時が流れた。

つづく

掲載した作品の著作権は全て作家月之宮成子に属します